

目的 妊娠中の労働遂行に関する提言のなかには、非妊時に測定した各種労働作業のRMRを使用し、妊婦に許容される労働強度を提示しているものもある。しかし、妊娠時のエネルギー代謝は特異であり、妊婦の労働遂行許容範囲のスケールとしての非妊時RMRの適用性には甚だ疑問が持たれる。この問題を明らかにするには、妊婦、非妊婦のRMR比較が要されよう。しかし、この比較を行うに先立ち、もう一つ検討されるべき課題がある。それは妊娠時と非妊時のRMRが同一の意味を持つのか否か、即ち、両値の比較が可能か否かという問題である。演者はこの問題を明らかにするべく、本研究を行った。

方法 妊娠個体における母体ならびに胎児のエネルギー代謝、酸素消費量等に関する文献調査を行い、非妊時のものと比較して考察した。

結果 RMRが、性、年齢、体格の差を越えた労働の強度の指数であることから、本題は子宮内妊娠産物が他の身体組織と同等に解釈され得るのか否かという問題である。そこで、この問題を明らかにする試みを通して本題の検討を行い、以下の見解に至った。即ち子宮内妊娠産物でのエネルギー代謝は、胎児という、もう一つの生命体の存在により、他の身体組織とは異なるメカニズムでその様相が変化する。そこで理論上、妊娠時RMRと非妊時RMRが持つ意味は異なると考えるべきであろう。しかし、胎児行動、子宮拘縮等の妊娠現象に惹起される子宮内妊娠産物でのエネルギー代謝量の変化のVolumeは少量であり、妊娠個体のRMR算出値を大きく左右するには及ばないことが推測される。従って、両値は実質上、ほぼ同一の意味を持つものとして扱うことが可能であると考えられる。